

ご自由にお持ち帰りください

Train Vert

トランヴェール

感じる旅、考える旅。

APRIL 2003 4

旅学対談

高橋克彦×赤坂憲雄

巻頭エッセイ

佐藤賢一

特集

菅江真澄と巡る 北東北

津軽・下北半島編

菅江真澄に強い関心を持つ人たちに
真澄のいったいどこにひかれるのか？
彼に触発され、どんな旅をしたのか？
各々の体験、意見を語ってもらいます。

のか

私の専攻は紀行文学ですが、来日前から菅江真澄を研究テーマにしようと思っていました。松尾芭蕉の研究でヨーロッパで著名なドンブリンディ(G.S.Dombady)教授に学び、東洋文庫の『菅江真澄遊覧記』を読んだのがきっかけです。最初にひかれたのは図絵ですね。真澄は、目にしたものをとても客観的に、かつ写實的に描いています。そこには「記録として残そう」という意図が明らかに見えます。



真澄からのメッセージは、異文化を「理解」する心

談 ヴィットカンプ・ローベルトさん
(関西大学文学部助教授)

近世紀行文学の代表というと、多くの人は「奥の細道」の芭蕉をあげると思います。しかし、芭蕉の紀行文は情緒的で、中世からの伝統的な流れの中にある。それに対して真澄の紀行には、近代へつながら科学的な視点があります。その意味から、むしろ真澄こそが近世紀行文学の代表ではないか、と私は思います。

日本に来て、真澄が歩いた北海道の南岸や秋田を旅しました。秋田では、秋田在住の真澄研究家の方にお世話になりましたが、3日間つきっきりで、私を案内してくれました。その親切さと、男鹿の海岸風景の美しさが、今でも印象深いですね。真澄の紀行にある東北人のやさしさ、日本の原風景に触れたように思ったのです。

真澄の紀行に、現代へのメッセージがあるとしたら、それは「理解」ということでしょう。彼の時代、三河から東北や北海道へ旅をするのは、今の海外旅行のようなもの。異文化と出合う旅だったと思います。しかし、真澄は行く先々の生活文化を批判もせず、誇張もせず、素直に受け入れています。

(Wittkamp, Robert F.)
1959年ドイツ・カーメン市生まれ。1994年に慶應義塾大学の研究生としてケルン大学より来日。のち独文学の訪問講師として勤務。紀行文学の分野から菅江真澄を研究し、2001年に論文「日本の近世紀行文学 菅江真澄の生涯と作品」を発表。2003年4月より関西大学文学部独文学科に勤務。



ローベルトさんが2001年に発表した『日本の近世紀行文学 菅江真澄の生涯と作品』。ドイツの文学研究にある紀行文学というカテゴリーの立場から、真澄の旅と作品を検証した論文。

現代のような国際化社会では、真澄がしたように、異なる文化、民俗をあるがままに理解するという姿勢がとても大切だと思います。私は、東北の風景が好きです。気候が母国に近いせいもあるかな。機会があれば、春か夏に、北東北の日本海側を各駅停車で旅してみたいですね。